令和8年度　文京区障害者地域自立支援協議会
第2回こども支援専門部会研修会

日時　令和8年8月3日（月）午後1時30分から午後4時37分まで

場所　文京区民センター2階　会議室2A

＜会議次第＞

1　開会

2　議題

(1) 放課後デイサービスの実践報告

ハッピーテラス千駄木第二教室　塚本氏

(2) 事例報告

放課後等デイサービスカリタス翼　宮田 葉月　氏

(3) 小グループディスカッション

(4) シェアリング

(5) パネルディスカッション

東洋大学福祉社会デザイン学部教授	髙山 直樹　委員
上智大学総合人間科学部心理学科名誉教授	荻野 美佐子　委員
吉村小児科院長	内海 裕美　委員
柳町小学校校長	内田 康予　氏

3　閉会

事務連絡、アンケート記入、クロージング

参加者

教育関係者（区立小中学校教諭、管理職、特別支援学校教諭）20名

教育センター（スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー等）7名

福祉事業所（区内放課後等デイサービス、児童発達支援、相談支援事業所等）28名

医療関係（医師、医療技術職員等）5名

その他　5名

自立支援協議会こども支援専門部会委員　15名

総合計　80名

傍聴者

２名

司会

放課後等デイサービスカリタス翼　　向井 崇　部会長

１　開会

向井部会長より挨拶、趣旨説明

２　議題

1. 放課後デイサービスの実践報告　ハッピーテラス千駄木第二教室　塚本氏

① 放課後等デイサービスについて説明

- 児童発達支援・放課後等デイサービスは、児童福祉法に基づく障害児の通所支援サービスであり、習い事ではなく、こどもの発達や生活を支える福祉サービスである。こども一人ひとりの特性や発達状況、生活上の困りごとに応じて、日常生活や社会生活を送りやすくすることを目的としており、本人支援だけでなく、家族支援、移行支援、地域支援・地域連携を総合的に行うことが定められている。
- 本人支援では、健康・生活、運動・感覚、認知・行動、言語・コミュニケーション、人間関係・社会性の5領域から総合的にこどもを捉えることが重要とされている。たとえば調理活動一つをとっても、手順理解、道具の使用、友達との相談、順番を守ること、衛生や食生活など、複数の領域が含まれる。
- 文京区では近年、児童発達支援や放課後等デイサービスの事業所が増えており、地域で支援を受ける機会や選択肢が広がっている。一方で、事業所ごとに対象年齢、集団の大きさ、得意な支援領域、通っているこどもの傾向などに違いがあるため、保護者、学校、医療関係者が各事業所の特徴を知ることが、適切なサービスにつなげるうえで重要である。

② 区内放課後等デイサービスの紹介

2. 事例報告

3. 小グループディスカッション

① インクルーシブ教育について

- インクルーシブ教育は世界各国で試行錯誤が続いており、まだ明確な正解がある段階ではない。インクルーシブ教育が難しい理由の一つは、「排除されない権利」と「一人ひとりに合った教育を受ける権利」の両立が難しい点にある。どちらも重要だが、同時に満たすには大きな課題がある。そのため、教育現場だけで解決するのではなく、福祉を含めた多職種連携が重要になる。今回、インクルーシブ教育をテーマにしたのも、教育と福祉などが連携して支える必要があるという問題意識からである。

- 多職種連携には構造的な「壁」が存在する。誰か個人が悪いのではなく、職種や制度の違いによる壁を見つけ、理解することが大切である。インクルーシブ教育を支えるには、特定の先生や個人が一人で背負うのではなく、チームで取り組むことが必要である。

② グループワーク、ディスカッション

4. シェアリング

以下、指名されたグループの発表

- インクルーシブ教育を進めるうえでの主な壁として、①インクルーシブ教育への理解の壁、②多職種連携の壁、③個人情報の壁がある。特に多職種連携の壁は大きく、医療・福祉・教育の間に心理的な壁や立場の違い、忙しさ、重視する点の違いなどがある。これらの壁を越えるためには、研修や交流会の実施、情報共有のルールや仕組みづくりが必要である。個人情報やセキュリティーの課題はあるものの、適切な仕組みがあれば情報共有がしやすくなり、多職種連携も進みやすくなる。また、役割分担をするためには、互いの役割や考え方を知ることが重要であり、そのためには「顔の見える関係づくり」が欠かせない。職種に関係なく、こうした場に参加して顔を合わせ、関係をつくり、そのつながりを職場に持ち帰って共感者を増やすことで、多職種連携の壁を崩していける。
- 教育・福祉・医療にはそれぞれ高い専門性や独自の文化があり、連携を進める中でも「守るべき違い」や専門領域の境界がある。特に学校には独自の文化があり、その違いがあいまいになると、かえって連携がうまくいかないこともある。その壁を越えるためには、他職種が入ることを「批判」や「駄目出し」と受け止めるのではなく、自分たちの専門性では届きにくい部分を支えてくれる「援軍」として前向きに捉えることが大切である。また、一人の支援者だけが評価されるのではなく、学校、福祉、医療など支援チーム全体で互いを認め合い、エンパワーし合うことが重要である。互いの専門性を尊重しながら、支援者同士も支え合うことで、それぞれが自信を持って専門性を発揮できる連携につながる。
- 多職種連携の壁として、こどものために何かしたいという思いは共通していても、学校や事業所ごとに熱量の差があることがある。また、本人の意思と、保

護者や学校の思いが異なる場合、支援が難しくなることも課題である。そのほか、個人情報の扱い、縦割りによる連携の難しさ、人員不足、連携を進めても報酬につながりにくい仕組みなども壁である。インクルーシブ教育については、小学校低学年では交流が進みやすい一方で、高学年になるにつれて障害のある子との間に壁ができやすいため、幼少期から自然に交流することが大切。壁を越えるためには、連携する際に知っている人がいるだけで、進み方が大きく変わるため、交流の機会を通じてお互いの顔を知ることが重要である。また、文京区の制度についても、関係者間で知られていないものがあり、縦割りの影響もあるため、みんなで学び合う機会が必要である。さらに、こどもや障害のある人自身が意見を言える場を増やすことも重要。

5. パネルディスカッション

・壁にはさまざまな意味があり、理解を深めるべき壁もあれば、それぞれの専門性を守るために必要な壁もある。そのうえで、互いの専門性や立場の違いを理解し、リスペクトし合うことが重要である。支援者同士が安心してつながり、連携できる関係を築くことが、壁を乗り越えるための第一歩になる。

・文京区には多くの関係者が集まり、大きな力があると感じられる一方で、事業所の質をどう担保するかが課題。自己評価や保護者評価はあるが、第三者評価がないため、事業所全体の支援の質を把握する仕組みが必要ではないか。一方で、「壁」という言葉を使うことで、かえって壁があると思い込んでしまうのではないか。連携は壁を乗り越えるものではなく、それぞれの専門性を活用し合うものとして捉えるべきである。

・学校・保護者・支援者それぞれの思いよりも、こどもを中心に考えることが大切。こどもがどう過ごしたいのかを軸にすれば、立場の違いも調整しやすくなる。互いをリスペクトしながら専門性を活かし合い、まずは相手の門をたたいてみることが、連携を進めるきっかけになる。

・こどもにとって何が必要なのかを、学校や支援者が一つ一つ話し合い、共有していくことが重要である。支援において明確な正解はないが、関係者が話し合いながら一生懸命考える過程そのものに大きな意味がある。多職種連携では、一人のこどもや家族に複数の人が関わることで、多様な視点が生まれ、よりよい支援を考えることができる。一方で、それぞれの思いや考えを十分に話し合う時間や場が持ちにくく、きちんと伝え合えないことが課題。そのため、地道であっても、このような対話の機会を

少しずつ積み重ねていくことが、連携を深めるうえで大切。

・インクルーシブ教育の在り方については、各国も模索を続けている。日本との教育理念の違いとして、諸外国では、インクルーシブ教育の前提となる民主主義教育を重視し、障害の有無にかかわらず、一人ひとりの自己決定権を大切にしている。単に共に学ぶというだけでなく、自分で決め、その決定に責任を持つという考え方が教育の基盤にあり、その延長にインクルーシブ教育が位置づいている。一方、日本では福祉・医療・教育の間でも「自立」「インクルージョン」「意思決定支援」などの概念がばらばらである。そのため、文京区としてまず理念や方向性のベクトルを合わせる必要がある。そのためには、こどもを中心に据えた具体的なネットワーク会議を行い、医療・教育・福祉が一緒に支援を考える場をつくることが重要である。実際のこどもや家族を中心に会議を行い、成功体験を積み重ね、それを各学校や地域に広げていくことが、顔の見える関係づくりにつながる。

・放課後の活動は福祉だけでなく「放課後教育」として位置づけ、学校内にとどまらず地域の中で多様な居場所や関係性をつくる視点が必要である。こども時代にどのような出会いや体験を持つかが、その後の意思形成や自己決定に大きく関わるため、放課後にも多様な人や場との出会いを保障することが重要。

・放課後等デイサービスには質の格差や事故の問題もあり、制度的な課題がある。すぐに制度を変えることは難しくても、文京区として望ましい支援や制度の在り方を見出していく必要がある。

・学校は、こどもたちが社会に出る前にさまざまな経験を積み、互いを理解しながらよりよい社会の在り方を学ぶ「小さな社会」である。教科を学ぶだけでなく、自分の特性や強みを理解し、他者と関わる力を育てる場でもある。一方で、学校だけでこども一人一人を十分に支えることには限界がある。そのため、担任や学校だけで抱え込むのではなく、多職種が連携し、それぞれの視点からこどもの姿や強みを共有していきたい。

・こども自身が自分で決める力を育てる教育も大切である。今後の学習指導要領でも、自分の強みを生かし、自分で選び取って生きる力が重視されている。

・放課後等デイサービスの専門性は、こども全体の発達や特性を理解するとともに、目の前の一人一人のこどもがどのような思いや生活背景を持っているのかを感じ取る力にある。知識だけでなく、こどもの思いを受け止め、生活全体に寄り添う姿勢が重

要。

・現代では、家庭や地域の中で生活力や対人スキルを身につける機会が減っており、障害のあるこどもだけでなく、一般のこどもも生活力や自分で考える力が不足している。そのため、放課後等デイサービスは、遊びや学習、生活を通してソーシャルスキルや自己決定の力を育てる大切な場となる。

・「こどものため」と言いながら、大人や保護者、事業所側の都合になっていないかを常に振り返ることも必要である。こども一人一人は異なり、家庭環境や日常生活の中で育っているため、その背景を丁寧に理解しようとする姿勢が求められる。

・こどもの生活に寄り添い、安心してSOSを出せる大人が周囲にいることは、こどもにとって大きな支えとなる。放課後等デイサービスに関わる人は、それぞれの専門性を生かしながら学び続け、こどもと向き合っていくことが大切である。

・こどもを理解するとは、目の前の姿だけを見るのではなく、その子が生きている時間や場を広く捉えることである。こどもにとって「今」は大切な中心であるが、その背景には家庭、学校、放課後等デイサービスなど、さまざまな生活の場があり、それらが日常を形づくっている。

・専門性とは、今見えていることだけで判断するのではなく、こどもの過去や未来、10年後・20年後につながる長い時間の中で、現在の姿がどのような意味を持つのかを考えられる力である。そのため、こどもを知るには、本人の今の状態だけでなく、生活全体や成長の流れを俯瞰し、こども自身がどのように育ち、成長していくのかを一緒に考えていく視点が重要である。

・「専門性」を強調しすぎると、支援が固定化され、支援者側の枠組みにこどもや利用者を当てはめてしまう危険がある。特に重い障害のある人の人生を振り返ると、出会ってきた人は家族、学校の先生、福祉職員、行政などに限られがちである。こうした関係は「強い紐帯」と呼ばれ、支援や保護にはつながる一方で、本人が自分で選ぶ経験や対等な関係を持つ機会が少なくなり、自立や意思表出が育ちにくい。

・重要なのは、「弱い紐帯」を生活の中に取り入れることである。弱い紐帯とは、友人、地域の居場所、芸術、音楽、スポーツなど、上下関係や従属関係ではない対等な人とのつながりである。こうした関係の中でこそ、本人の意思表出や自己決定が生まれやすくなる。放課後等デイサービスや放課後の場も、強い紐帯になりすぎるのではなく、弱い紐帯を広げる役割を担う必要がある。

・フィンランドの「ネウボラ」のように、妊娠期から出産後、乳幼児期、療育、学校支援まで切れ目なく伴走する仕組みも重要である。早期から家族を支え続けることで、虐待予防や少子化対策にもつながり、社会全体のコストを下げる可能性がある。文京区にも地域資源があるため、こうした切れ目のない支援の仕組みを活用・発展させることが求められる。

・さらに、多職種連携を実現するには、実際に連携するための会議体をつくることが必要である。こどもを中心に関係者が集まり、事例を共有し、成功体験を積み重ねていくことで、支援者同士のつながりが生まれる。最終的には、こどもたち自身の声や姿から学びながら、必要な支援の形をつくっていくことが大切である。

3　閉会

向井部会長よりまとめ、閉会